
恋の野球物語

弓永 詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の野球物語

【Nコード】

N1307E

【作者名】

弓永 詩

【あらすじ】

天才ピッチャー、神谷涼は1年生ながら元広高校のエースだった。ある事故が起こるまで…。

プロローグ

「ストライク、バッターアウト」

150キロを超えるストレートボールが、キャッチャーミットへおさまった。

「試合終了、1対0で元広高校は初の甲子園進出です。しかも、神谷涼選手の完全試合のおまけつきです。いやー、甲子園での活躍が楽しみです」

実況アナウンサーの声が鳴り響く。

「やった、やったよ」

内野の選手がピッチャーに近づいてきた。

「おい、もっと喜べよ。甲子園出場に完全試合のおまけつきだぜ」

サードの大柄の男が言ってきた。

「そうだぞ。そんな嫌な顔をしやがって」

キャッチャーの防具をつけた、男が言ってきた。

「おい、無駄口をたたいてないで、整列しろ。」

セカンドを守っていた、上級生がせかしてきた。

そして、みんなで整列をしてその試合は終わった。

足早に、グラウンドを去って、一人で学校へと向かった。

学校に戻って、退部届けを顧問の机においた。

「約束を果たしたぞ、凜」

そのまま野球部へは戻らなかった。

プロローグ（後書き）

よかったら、この小説の感想など、さまざまな意見がほしいと思っています。

悪いところなど指摘してもらえるとうれしいです。

別れと出会い

桜を見上げながら、学校へと歩いていた。

桜が舞い散る、4月。

あの試合以降、俺は野球部へとは行かなかった。

そして、あっという間に9ヶ月もの時がたっていた。

「あの、神谷選手ですか？」

いきなり、声をかけられた。

「はっ、そうだけど」

そう言いながら、その声が聞こえたほうを向いた…そして、驚いた。

「凜…」

「えっ、違いますよ。私は花野桜と言います」

すぐに、現実に戻った。その子の顔を見ると、凜とは正反対で綺麗というよりは、可愛い顔立ちで、大和撫子というよりは、フランス人形のように目が大きく綺麗な髪の顔立ちをしていた。凜とはぜんぜん違うじゃないか…

「すまない、で、用は何だ。」

「あつ、はい。それはですね、野球部に戻ってください。」

無視して、歩き出した。

「えっ、待ってください。」

さらに、無視し続けた。

「神谷先輩。私、去年の広島県地区予選決勝の投球を見て、ファンになったんです。って、待ってくださいよ」

無視し続けて、歩き始めた。ただのミーハーなファンか。

「神谷先輩待ってくださいってば、あの試合から先輩がいる高校に入って、野球部のマネージャーになることが私の夢になったんですから」

はあ、なんなんだ？このストーカー女わ。

「ですから、野球部へ戻って甲子園を目指しましょう。」

うざかった。最近はこういうやつらも減ってきたのに。

「ごめん、野球をする気はないんだ。だから、じゃーな。」

最初だったので、点検的な答え方をした。そして、走って学校へ向かった。

そう、退部届けを出した当時、周りのやつらは今の女みたいにウザ

イヤつがいっぱいいた。しかし、さすがに9ヶ月もたった今頃では誰にも言われることがなかったが：

「おはよう、涼」

幼馴染の木下理恵が挨拶をしてきた。

「ああ、おはよ。」

「なんだ、なんだ。顔が暗いわよ」

「なんでもない…」

少しめんどくさいことはあったが、喋るのもめんどくさい。

「そんな暗い顔して、なんでもないって言われてもな、理恵」

幼馴染の宮本大地が、話しに加わってきた。

「勝手に言ってる」

そう言って、席へ向かって歩き出す。

「神谷先輩、置いて一人で行くなんて、ひどいです」

ストーカー女が、教室まできやがった。

「誰だ、あの子？」

「かわいい」

そんな言葉が、行き交う。

「涼、あの子だれ？」

「あんなかわいい子、この学校にいたっけ？」

少し怖い顔の理恵と笑顔の大地が同時に言ってきた。

「誰って聞かれても、ストーカー女？」

とりあえず、大地の質問にはスルーだ。

「誰がストーカー女ですか？私は、一年生の花野桜です、覚えてくださいね」

すぐ、そばまで来ていた。

「で、なんなんだ。教室まで着やがって」

「それはですね。神谷先輩に、野球部へ戻ってもらうためです。」

クラスの雰囲気は凍りつき、みんなが黙ってしまった。

「なんですか、この雰囲気」

ストーカー女は空気を読めないようだ。

そして、一番最初に声を発したのは理恵だった。

「えっと、花野桜ちゃんだったけ？それは…」

しかし、途中で口ごもってしまった。

「俺は野球は二度としない。野球部へ戻るつもりもない。だから、二度とこの話をするな。」

きつく、低い声でストーカー女に言った。

「無理です。私は諦めません。神谷先輩が、野球をしてくれるまで、言い続けます。あつ、ホームルームが始まりますから、戻りますね。」

そういうと、ストーカー女は足早に教室へと戻っていった。

「おい…」

すでに、教室にストーカー女の姿はなかった。

これが、花野桜との出会いと始まりだった。

別れと出会い（後書き）

物語りの始まりの第一部です。

この物語の感想を良かったらコメントください。

悪いところや、ここはこうしたらいいと思うことなど聞かせてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307e/>

恋の野球物語

2010年12月14日14時59分発行